

「底が突き抜けた」時代の歩き方 545

「自分を捨てる」こと - さよならだけが人生さ

映画館ではなくNHKの衛生チャンネルで観た韓国映画『春の日は過ぎゆく』（01年、ホ・ジノ監督）は、集録技師の青年（ユ・ジテ）と、離婚経験のある年上のラジオ局のDJ兼プロデューサー（イ・ヨンエ）の恋愛と別れを描写している。一緒に仕事をしているうちに二人は愛し合うが、仕事が終わりに近づくにつれて二人の間に微妙な変化が起こる。青年が女性との結婚を考えているのに対して、女性のほうは離婚を経験しているだけに青年のように結婚に無邪気にはなれない。青年が結婚に積極的になればなるほど、女性は青年の一途さが重荷になり、離れて行こうとする。女性のそんな行動が理解できない青年は、理由を訊こうとして女性に付きまとうが、女性は冷たくあしらう。仕事が続けられなくなるまでに落ち込んだ青年は女性の職場を張り込み、女性が同僚の男性と親しそうに車に乗り込むところを目撃する。嫉妬と復讐の念に駆られた青年は女性の後を付けて、駐車場で女性の乗っていた車に傷つける愚行を犯したりする。

青年は堕ちるところまで堕ち、自分のあまりもの惨めさに打ちのめされ、自己嫌悪に陥るが、時間が経過してしだいに立ち直っていく。一方、女性は自分が青年をそこまで追い詰めたことに自責の念に駆られており、青年との関係の修復を願うようになる。久し振りに出会（うことにな）った二人は、なにごともなかったかのように言葉を交わす。女性は青年の腕に自分の腕を絡ませて、馴れ馴れしい態度で青年を誘おうとする。無言でいた青年はしばらくして女性に「もうやめよう」と言って、腕をほどいて別れを告げ、女性が去っていくのをじっと見送る。すべてが終ったのである。ラストは、青年が女性と共に仕事をしていたときの録音を懐かしそうに、いとおしそうに聴いている場面で締め括られる。

このラストシーンによって、凡百の恋愛映画にはみられない味わい深さが微妙に滲み込んでくる。女性は青年に愛想を尽かして離れようとしたのではなく、逆に青年のあまりもの無邪気な一途さが怖くなった振舞いであつたし、青年のほうも女性の身勝手さが嫌いになって別れを告げたのではなく、別れた後も女性を想いつづけていたからこそ、女性ときれいに別れようと決心したことが伝わってくる。青年は女性との修復よりも、女性との幸福であつたときの記憶のほうを選択したのである。なぜか。それほど彼は自分の惨めさに打ちひしがれていたのであり、彼女との関係の喪失に必死に耐えてきたからだ。別の言い方をすると、女性のなにげない残酷な仕打ちに彼は深く傷つき、やり直そうとする彼女の豹変についていけなくなったからかもしれない。いずれであれ、彼

は関係を整理することを覚え、幸福な記憶を収納するなかで「自分を捨てる」ことを学んでいったのである。

40年ほど前のフランス映画『男と女』(クロード・ルルーシュ監督)もまた、新しい愛の人生に生きるために、かつての亡夫との懐かしい記憶を整理しようとする物語である。スタントマンだった夫を事故で亡くした女性は、離婚経験のある男性と知り合って新たな人生に踏み入ろうとするが、愛を育むたびに亡夫との幸せであった生活の記憶が甦ってどうしても前へ進むことができない。関係が立ち往生するなかで、いま新しい生活に踏み出せなければ一生このままであることを悟った女性は、亡夫との記憶から抜け出して新しい人生の再出発を決心する。いまを生きるためには過去の中に生きることをやめて、いまの生活の中に過去の記憶を保存することの大切さが映画から伝わってくる。新しいなにかを掴むためには、かつてのなにかを捨てなくてはならないということだ。ここでも「自分を捨てる」ことに耐えることが描かれている。

整理するということは自分の人生を整理することであり、捨てるということは自分の人生の中で「捨てないものを選び取ること」だと語るのは、達人対談「収納上手の極意は『捨てどき』の見極めにあり」(『婦人公論』05・12・7)で、収納カウンセラーの飯田久恵を相手に語るマーケティングプランナーの辰巳渚である。二人の対談は、片付けが苦手で効率よく家事をこなすことができなかった専業主婦の飯田が、仕事をするようになるとたちまちそれまでのようにはいかなかったという体験談から始まる。

「時間がくれば掃除の途中でも家を出なきゃいけない。なんとか家事を早く終わらせたい。それには片付けだと気づいたんです。ものが日頃からきちんと整理・収納されていれば、ものの出し入れに時間をとられることなく、家事はスムーズに進められます。でも現実には、ものはあちこちに出しっぱなし。便利なところに物入れがあるのに、しまえないのはなぜ? あらためて物入れの中をチェックしてみると……。」「いただきものの器とかタオルとか、ひたすら詰め込んで。そのスペースだけじゃ足りず、さらにプラスチックの収納ケースを買って、その中もすでにいっぱい。そんな状態できちんと収納するには、もうものを捨てるしかありません。そこで、「ええい、この際!」と、思いきって使っていないものを処分しました。しばらくやっていなかった編み物や油絵など、趣味の道具も捨てましたよ。」

この「捨てる」勇気と覚悟を通じて「捨てる」人生哲学が会得されたことが、次のように開陳されている。「それまで処分できずにいたのは、自分の人生で何がしたいのか、はっきりわかっていなかったからだと気づきました。その時、私はシステムキッチンの設計をライフワークにできそうな予感があった。仕事も勉強もとなると、当分、趣味をやる時間はないはず。そう割り切った時、はじめて処分する決心がついたんです。たくさんものを処分すると、部屋はスッキリ、家事もうんと楽になりました。家のことを早くすませれば、自分の時間も作れる。これが、私の『捨てる』生活のスタートでした

ね。」辰巳も飯田に呼応して言う。

「私も、掃除は嫌い、片付けは苦手です。かつての日々を振り返ると、部屋の中はものがどんどん積み重なる一方で、失くしものをしては見つけられず、人生の3分の1は探しものをしているような状態でした。さすがにこれはまずいと思った時の解決法が、『捨てる』だったんですね。手元に置いておかなくていいものは捨ててしまう。そうすれば、必要なものだけが残ります。受信したファックスなら用件をその場でノートや手帳に転記してしまえば、用紙は捨てられる。ダイレクトメールも、読んだその場で捨てる。そうやってものを減らしていくと、それまであちこちひっくり返しても出てこなかった探しものが、3ヵ所探せば出てくるようになった(笑)。これって、私にとっては大きかったんです。」

「捨てる」ことが「そんなに悪いことだろうか」と思ったことが、『捨てる』を突き詰めて考える1つのきっかけにな」った、と辰巳は振り返る。

「マーケティングの仕事で、ものが作り出されていく最先端の現場を見ていると、『こんなものいらん』と言いたいものがいっぱいありますよ。」

ちょっと目新しいから、話題になったから、便利そうだからという理由で、あまりにも簡単にものが買われすぎている気がします。本来なら、ものは人を幸せにするためにあるはずなのに、ちょっと使っただけでしまい込まれる。あげくの果てに、大量のものが部屋をますます狭くしている。それが経済を動かしているって、どういうこと？ って思いますよね。私自身、押し入れを開けるとものが崩れ落ちる状態を経験し、無自覚にもものをしまい込むのはやめようと思い至ったんです。捨てるというのは、逆に、捨てないものを選び取ることであります。人は『要るかどうか』という目で見ると、何でも『要る』になっちゃうけど、『捨ててもいいかな』という視点で見ると、はっきりした判断が必要になって、ものを選び取っていく。」

なにが必要でなにが必要でないかの判断の前に自分を立たせることができるかが、肝心であり、そこが人生にとっての勝負どころであることが語られている。「捨てるというのは、逆に、捨てないものを選び取ること」であり、「捨てる」ことによって「捨てないもの」が浮かび上がってくるのである。自分の人生にとって大切なことはなにか、がモノを積み上げるなかにではなく、モノを「捨てる」ことのなかに含まれているのだ。二人は掃除や片付けについて語り合いながら、それ以上のことについて、つまり、あらゆる問題に当てはまる「掃除」や「片付け」にまで入り込んでいるのに気づく。たとえば、知識というものもまた、うずたかく積み上げることよりも、積み上げてきた知識を「捨てる」ことのほうが困難であり、いかに捨てていくかが知識にとっての最大の課題であることがみえてくる。「捨てる」ことは「自分を捨てる」ことなのだ。

「捨てるは捨てないの始まり」のキャッチフレーズを掲げる飯田は、「捨てるつらさの中で、自分にとって、何があれば幸せなのか、見つけられ」と言い、「捨てられない

人」についてこう分析する。「捨てられない人のタイプには2種類あると思うんですよ。捨てるには、まずものから心を離さなくちゃいけない。で、1つのタイプは、心は離しているけど、手離し方がわからない人たち。この場合は比較的、簡単です。リサイクルの方法や引き取ってくれるお店を探す、消費生活センターに問い合わせるとか、具体的な捨て方さえわかればいいんですから。難しいのは心を離せない人たちです。」

「捨てる」ことができないのは、モノに自分の心が入り込んでいて、モノから自分の心を引き剥がせないからだ。そう説明されている。モノはもはや単なるモノではなく、モノに投影されている自分自身にほかならない。それはモノに対する愛着のかたちであらわされる。もちろん、モノはモノであって、自分自身ではありえない。そんなことはわかっているようにみえるのだが、モノに対する愛着は単なるモノをもう一人の自分であるかのように思わせる。つまり、自分の心がモノから離れないだけでなく、モノが自分の心から離れないのである。モノと自分とが一体化してしまっているようにそこでは感じられている。だから、モノを「捨てるつらさ」は自分を「捨てるつらさ」になってしまう。モノを捨てられず、自分を捨てられず、自分が愛するもう一人の自分としてのモノに囲まれて、どこにも投影されない自分を埋没させていく。

モノに対する愛着は辰巳も指摘するように、『いつか必要になるだろう』『いつか着るだろう』という、『いつか』の心理を働かせて、「捨てる」心を封じ込めていく。「いつか」がやってこないこともはっきりしている。「いつか」は「いつか」がやってくることはないから、いつでも「いつか」なのである。「いつか」がけっしてやってこないのは、「いつか」にはいまが含まれていないからだ。いまのない「いつか」がいつまでたっても、いまにならないのはしたがって当然であり、いまを驚愕まない「いつか」はどこにも着地できずに浮遊しつづける以外にない。「いつか必要になる」自分はどこにもいないし、「いつか着る」自分に二度と出会えないという真実に直面することが恐ろしいし、「いつか」の気持ちのなかでずっと回避しつづけたいのだ。

「でも、このまま持っていて、この先どういうふうにするのか、その『いつか』を見極められない。せっかく買った洋服も、なぜ着ないのか、その理由を考えない。自分には似合わない。飽きた。形が古くなった。着ていると疲れる。今の自分の生活に適さない

— そこまで突き詰めて、明らかにすれば、心も決まると思うのですが」と言う飯田に、辰巳は『いつか』の心理は『もったいない』の別バージョンです。捨てずにとっておくために『いつか使う』ことに期待するけど、多くの場合、『いつか』はやってこない（笑）。判断がつかない場合、私が目安にしている基準は、『使い切ったら捨てる』『使う分に対して適量を超えたら捨てる』『好きなもの以外は捨てる』。どれかに当てはまったら、迷いを吹っ切って捨てるわけです」と、自分の「捨てる」基準を開陳する。

「いつか」の心理に対抗するためには、「せっかく買った洋服も、なぜ着ないのか、その理由を考え」るべきで、それを突き詰めさえすれば、「心も決まる」と飯田は主張す

る。立ち止まって考える。そして自分を納得させればいいのだ。自分自身と向き合うことなのである。「いつか」は自分自身と向き合うことを猶予する言い訳にほかならない。買った洋服を着ないのは、買った洋服を着る自分をどこかで受け入れたくないからであり、にもかかわらず、それを捨てようとしなないのは、洋服を買った自分に固執しているからだ。着ない洋服のことはもはやどうでもよく、自分が「せっかく買った」ということだけが自分にいつまでもまとわり付いているのである。自分が「せっかく買った」けれども、「自分には似合わない」洋服だから、「捨てる」。くやしいけれども、「捨てる」。「捨てる」決心は自分に、二度と着ない洋服は買わないという背水の陣を小さく敷かせるのだ。小さくても「背水の陣」は自分を鍛えてくれるのである。

着ない洋服を捨てずに持ちつづけることによって、持っているということだけで自分を満足させようとする。そこでは服は着るものであるよりも、持つものになってしまっている。したがって、捨てないということは持ちつづけるということである。モノの本来の役割である「役に立つ」ということは放棄させられて、モノは持つものにすり替わってしまっているのだ。モノが使うものではなく持つものに替わってしまうなら、当然「捨てる」ことはできなくなる。もちろん、使うモノが持つモノに替わったとしても、モノは捨てられずに押し入れの中に突っ込まれているか、部屋の片隅に置かれているだけのことであって、持つモノではなくなっている。要するに、ゴミであり、ゴミが溜まっているだけのことなのだ。それでも持っていると思い込むし、錯覚しつづけたいのである。

一体、なにが問題なのか。「せっかく買った洋服」を着ないことが問題なのではない。自分が着ないということに決着をつけられない自分自身が依然として問題なのである。着ない洋服を「捨てる」かどうかが問われているのではなく、着ない洋服を「捨てる」かどうかの決着がつけられない自分自身を「捨てる」ことができるかどうかが問われているのだ。「捨てる」ということはしたがって、自分の人生を変えることであり、自分の人生をコントロールできるようになることである。捨てずにいることには決断が伴わないが、「捨てる」ことには決断が伴う。どんなに些少であれ、決断しながら自分の人生をかたちづくっていくことが肝要なのである。小さな決断を積み重ねていくことによって大きな決断へと至るのであり、少量でも水が流れていなければ大河は出現しないように、大きな決断は普段の小さな決断を抜きにしては起こりえないのだ。

辰巳が「捨てる」基準をつくっているのは、生きる基準を自分に課していることに等しい。「使い切ったら捨てる」ことは、モノは使い切るまで役立てることであり、自分を「使い切る」まで生きることが暗示されており、自分自身を「使い切ったら捨て」ればよいのだ。「使う分に対して適量を超えたら捨てる」ことは、自分の能力の限界を知ることであり、自分の精一杯の限度まで頑張ったとき、自分を思い切って捨てることができる。「好きなもの以外は捨てる」ことは、自分の好みを際立たせることだ。そこで

好きな自分に固執することが肯定されているように見える。それは、自分という人間を知ることにつながっている。自分の好きなものを選び取ることであるからだ。「自分を捨てる」というテーマのなかで考えると、好きな自分をどこまで捨てることができるのか、という問いとして最後まで引きずらなくてはならないことが感じられてくる。

辰巳が目安にしている捨てるためのこの基準にも当てはまらない場合についても、次のように話し合われている。「捨てられないプレゼントとして、お姑さんから着物をいただいたけど、どうしようという相談、よく受けませんか？ 自分には似合わないし、着る機会もないけど、断ると悪いから」という例にみられるように、「もらっても処分に迷う義理ある方からのいただきもの」についてはどうすればよいのか、と辰巳が口にする、飯田は「相手にすれば、やっぱりもらってもらうと嬉しいし、拒否されるとシュンとするわけですよ。私なら人間関係がぎくしゃくするのを避けるために、『使わないけど』と思いながらも、いただくでしょうね。私が目指すのは『幸せ』。目標がはっきりしていれば、折り合いはつけられるはずですよ」と答える。だが、「使わないけど」いただいて、部屋の隅に置いておくのであれば、モノが「捨てられない」と同じことになるのではないかと。

この問題に対して辰巳は、「自分が何を大切にしたいのか考えるということですよ。着物そのものを重視するなら、『自分は着ないので、別の方に差し上げてください』と言えばいいし、お姑さんとモメないのを優先するなら、黙って受け取り、あとでこっそりバザーに出したり、人にあげてもいい」と割り切るしかない態度を鮮明にする。しかし、そんなに割り切ることができないのも人間の常である。そんな人間は「捨てる」に対してどのように振る舞えばよいのか。飯田は割り切れない人間に対する配慮もみせる。

「いただいてすぐだと、『せっかくくくださったのに処分するのは悪い』という気持ちになりますね。私は、『リサイクルスペース』を家の中に設けて、バザーに出したり、リサイクルにまわすものを置いています。いただきものは、最長2年などと期間を決めて、いったん入れておき、『義理の有効期限』が切れたら処分。これだと、いただいた方への義理も立ちます。ただ、迷いに迷っても、やっぱり捨てられないケースもあります。」

自分が買ったモノであれば、自分を納得させることによって捨てればよいが、人がくれたモノであれば、どうしてもそこに相手の気持が入り込んでくるので、「せっかくくくださったのに処分するのは悪い」という気持ちが自然に湧き起こってくる。それは当然のことだ。たとえ辰巳が言うように、「黙って受け取り、あとでこっそりバザーに出したり、人にあげてもいい」としても、気持の底に罪悪感なり、^{いわ}曰く言い難い負い目意識のようなものがどんよりと巣くうことになるのは避けられない。モノをあげたり、もらったりすることに対する一種の処罰のようなものかもしれない。辰巳の割り切りかたでは人間関係のそのような^{きび}機微はどうしてもこぼれ落ちてしまう。モノはいかようにも処理することはできても、そのモノに投影されている人間関係の機微のようなものは一体ど

のように処理すればよいのか。モノの処理だけではなく、人間関係の機微の処理の前にも「捨てる」行為は立たなくてはならない。

すべてはモノを貰った側、モノを預けられた側の問題である。どう決着を図ればよいのか。飯田の解決法は、「いただきものは、最長2年などと期限を決めて、いったん入れておき、『義理の有効期限』が切れたら処分」というものである。「義理の有効期限」を決めるのは自分であり、「これだと、いただいた方への義理も立」つとみなすのも、自分である。要するに、自分をどう納得させるかなのだ。したがって、人によっては期限が1年の場合もあれば、3年の場合もあるだろう。「義理の有効期限」というものは自分の納得のさせかたであり、気の済ませかたなのだ。ただその「義理の有効期限」が一定とは限らない。人との付き合いかたは一定ではないからだ。付き合いが濃密であればあるほど、「義理の有効期限」も延長され、「迷いに迷っても、やっぱり捨てられないケースもあ」って、「自分を捨てる」自分が存在しなくなる最終まで引きずる場合も起こってくる。

「収納のカウンセリングで相談者のお宅にうかがうと、部屋に合わないタンスをよく見かけます。結婚する時に親に買ってもらったもので、捨てるのは悲しい、親に悪いと。情が深い方で、まさに『親の恩がタンスの形をしている』(笑)。それならば、『無理に処分しなくてもいいじゃないですか』とアドバイスします。捨てない状態は変わらなくても、『タンスが親の恩なんだ。だから部屋が狭くなっても私は持っているわ』と納得すれば、気持ちはスッキリするようです」と飯田は、モノは使うか使わないか、必要か必要でないかの次元には収まらない究極のかたちを取っている場合もありうることに言及する。親と同居しているつもりで、親に買ってもらったタンスをいかに古びていようと、いかに役立たずになろうと、親を捨てられないようにして傍に置いておきたいという気持は、そんなに無下にすることはできないということだ。

ここで一体、どのような問題に直面しているのか。人間とはつくづく不合理な生き物であるということである。とんでもなく不合理であるからこそ、合理的であろうとすることへの欲求が募って止まないのだ。不合理な感情と合理的なるものへの欲求とがせめぎ合っているといってよい。なるほど使うために買ったモノを使わなくなったから「捨てる」ことは、一見合理的な行動である。だが、使うつもりで買ったにもかかわらず、使わなくなってしまったということは合理的とはいえない。使わないものを買ってしまったことになるからだ。つまり、人間はよくよく考えれば使わないことがはっきりしているにもかかわらず、ついその場の勢いで買ってしまうという不合理な感情に支配されやすい生き物なのである。その不合理な感情はなにに由来しているのか。使わなくてもほしいという感情である。書物であれば、読まないのは明白であるのに手を伸ばしてつい買ってしまうのである。

所有の欲求が、必要なために入手するという人間の合理的な行動を狂わせるのだ。所

有の欲求が不合理であるのは、なんのために入手するのかという合理的な思考が所有の欲求より先にやってこないからである。ほしいからほしい、自分のモノにしたいという欲求は限りなく、どんな他の感情にも勝っており、その欲求が持続しているあいだは入手に対する思考は抑圧されている。そして自分にとって必要のないものがどんどん買われて行き、窮したところで必要かどうかを迫られ、遂に「捨てる」ところにまで追い込まれる。不合理な所有の欲求は行きつくところまで行って、合理的な思考に席を譲らざるをえなくなる。そのようにして不合理な感情は行き詰まり、合理的な思考を受け入れていくようになるが、不合理な感情は所有の欲求よりもっと下層にある、モノを通じて人とつながりたいと願う宗教的な感情にまで遡るとき、合理的な思考ではどうしても処理できなくなる。

親からの贈り物は単なるモノではなく、「親の恩がタンスの形をしている」とみえるように、恋人からのプレゼントも単なるモノを超えた、燃える情愛がそこには込められている。人間は自分の気持を相手に伝えるために、プレゼントに託すからである。しかしながら、タンスに子に対する親の思いがいくら込められていようと、タンスはタンスでしかないことも明白である。恋人からのプレゼントの指輪にしても、所詮指輪は指輪である。いくら単なるモノではない、深い情愛が込められたタンスや指輪であろうとも、タンスはいつかは破損するし、指輪もまた紛失を免れえない。そのとき、それらのモノに込められた情愛も破損したり、紛失していくのだろうか。モノとして捨てざるをえなくなるとき、思い出や情愛も一緒に「捨てる」のだろうか。

そうではあるまい。モノとして捨てたとしても、思い出や情愛はもはやモノから切り離されて、自分の心の中にしっかりと場所を占めて保存されていくにちがいない。映画『春の日は過ぎゆく』の、女性と別れた青年がそうしたように、だ。もしそうであるなら、プレゼントされる側はタンスや指輪を貰ったとき、タンスや指輪から情愛を切り離して、モノはモノに返し、情愛は情愛として自分の心の中に仕舞い込むことができる筈である。タンスはあくまでもタンスとして、家具の機能性の面でのみ評価してもよい。しかしこのことが困難なのは、プレゼントする側が自分の思いをモノに託しているからだ。単なるモノを超えたモノとしてプレゼントしているという気持が、プレゼントされる側に伝わるから、モノと思いを切り離そうとする合理的な思考はそこで遮断されてしまう。人間の気持は言葉やしぐさだけで伝わるよりも、モノを通してのほうがはっきりとよく伝わるし、なによりもモノに対する人間の欲求の強さが根底に横たわっているのだ。

おそらくこういうことかもしれない。モノに気持が込められていくように、愛情のある品々やプレゼントされたモノなどで、人間は自分の世界をかたちづくらうとするのである。いいかえると、自分の世界を持たない人間は自分の縁ゆかりのあるモノを寄せ集めることで、自分の世界をかたちづくらうとするのだ。もちろん、そうしようと思っているだけで、かたちづくられていく自分の世界は本当には自分の世界ではありえない。そこで

は物質的な空間性の確保が先行されているだけで、自分の世界に不可欠な精神性は希薄であるからだ。自分の世界というものは現実の中にたとえ場所を占めなくても、そして自分に縁のあるモノを周囲に寄せ集めなくても、成り立たなくてはならない。モノによってかたちづくられていく自分の世界が、仮に火事や災害等の不慮の事態によるモノの消失によって一挙に瓦解するなら、もともと自分の世界はモノに憑いていただけのことで、本当にはかたちづくられてはいなかったのだ。

モノを「捨てる」ことに抵抗を感じるのは、おそらくモノによってかたちづくられてきた自分の世界が目減りしていく（ように思われる）ことに耐えられないのである。自分の世界はモノの集積から抜け出していかななくてはならないのに、モノがどんどん集められることによって自分の世界が堅固になっていくと錯覚されているのだ。だが所詮モノはモノであり、自分の世界が確固たるものになっていくように感じられても、あふれ返るモノで自分自身が窒息に追い込まれるのは避けがたい。そしてモノを「捨てる」事態が遂に訪れる。泣く泣くモノを「捨てる」としても、そこでモノをいくら捨てても、自分の世界にはなににも変わりはないことを、むしろモノに憑いた自分の世界などは虚妄にしかすぎないことを悟らなくては、自分の世界は永遠に自分にとっては無縁であるといわねばならない。

「私もものに対する情は深いほうです。たとえば本。20代半ばまで、1冊たりとも捨てずにいました。一人暮らしを始める時、実家に全部置いていき、そこで初めて『要らないんだ』と気づきました。欠落感があるだろうと思っていたのに、何も感じなかった（笑）。その後も実家に置きっぱなしで、最終的に処分するまで10年かかりました。

今、私は本を2つに分類しています。1つは、何度も読み返すお気に入りのものや資料として必要な『保存用』。もう1つは、ちょっと興味があったり、調べもののために買って、すぐ用済みになる『情報用』。この『情報用』は一定量を決めておき、溢れた分は処分します。情報系の本は続々と出版されるし、必要な時、『どこを探せば、その情報にたどりつけるか』を知っていれば事足ります。」

いよいよモノは精神性に深く関わる本の領域に及び、本を「捨てる」ことについて辰巳が口火を切っている。本については二つのことが考えられる。一つは、読むつもりで買ったのに一度も目を通さずにそのまま積み上げられている本であり、もう一つは、一度は目を通してものの、二度と読むことはないであろうのに捨てられずにいる本である。前者は買ったけれども使わないモノに属し、後者は使ってはみたけれども用済みになったモノに属しているようにみえる。ただ本に対する愛着はモノに対する愛着ほど大きくはないと感じられるのに、読まない本はどうして捨てられないのか。「いつか」読むかもしれないからか。いや、読まないことは確実だと思っていても、捨てられないのである。捨てたくないのである。本に対する愛着でも思い出でもないし、せっかく買ったというほどの価格でもない。モノは思い切って捨てられるのに、本はそうすること

ができないとすれば、その理由は一体どこにあるのか。

この問いは、モノとモノとしての本とは本来的にどう異なるのか、という問いにほかならない。それは精神性の問題である。モノそれ自体には精神性はなく、愛着や思い出等の精神性をモノに込めるのは人間の側である。しかし、本はそれ自体としての精神性を備えている。モノはあくまでもモノでしかないが、本はモノには収まらない精神世界として書棚に配列されている。本は「精神としての人間」であるという点が他のモノと自体を峻別しており、情報系の本と異なって、精神世界が濃密に感じられる本ほど、読む読まないにかかわらず、捨てがたく思われるにちがいない。更に、モノには使わなくてはならないという衝迫を起こさせるものはほとんどないが、本というものはそこにあるだけで読まなくてはならないという衝迫をこちらに起こさせるようなところがある。その衝迫を感じて本を読むに至るかどうかは別にして、読もうと思って購入したときの熱さを思い出させるようなところがあるのは否めない。

モノと異なって本の場合は、モノとして「捨てる」だけでなく、知として「捨てる」ことも課題となってくる。精神性のないモノは「捨てる」ことだけが課題であるが、本は精神性が濃密であるが故に、モノとして「捨てる」以上に本の精神世界からいかに脱却するか、それだけの力量を身につけることができるかどうかが問われている。つまり、本はモノとして「捨てる」だけでは捨てたことにはならず、知として読み手の精神世界にまで喰い込んできたものまで「捨てる」とき、初めて本は捨てられるのである。本を「捨てる」ことは本の外へと出て行くことであり、本来的な本の役割は読み手を本の外へと連れ出して行くことにあり、そのために本は捨てられることを待っているといえるかもしれない。本の外へ出て行くことはもちろん、本を通して現実には接するありかたから外へ出て行くことであり、現実には丸ごと申し掛かられてくる生きかたへと赴くことである。「捨てることまで考えながら、買わなくちゃいけない」という飯田の言葉を受けて、「よく、『捨てる』技術は『買わない』技術ですかと訊かれます。『買わないのがいちばんですよね』と。でも、自分にとって、最適なものだけを選び取り、無駄をまったく出さずに上手に生きていくことが果たして幸せなのかなあと、ちょっと疑問もあります。あまりに無節操に買い、無節操にため込むのは論外にしても、無駄なものは絶対に買わないというのもしない。まあ、私は自分が買い物好きだからということもありますけれど、買う喜び、ものを手に入れる喜び - 自分で働いて得た１０万円でバッグ買った！

という物欲を、決してくだらない欲望だと思いたくないんです」と辰巳が言うとき、買うこともせず「捨てる」こともしないところへ行きつくのではなく、買うことの喜びを味わいながら、「捨てる」ことも引き受けなくてはならないということだ。

「捨てることまで考えながら、買わなくちゃいけない」ということは、死ぬことまで考えながら、生きなくちゃいけないということであり、「むしろ『捨てる』技術は『買う』技術でもある」という辰巳の言葉は、「捨てる」技術は「生きる」技術でもあるという

ところまで引き伸ばしたほうがよい。辰巳はオマケや景品、商品サンプルについても、「その場で『要るか、要らないか』のふるいにかけることが大事」と言う。その場での決断が大事であり、一度ため込んで「捨てる」という行動は、「相当に意識的な作業で、頭腦的な判断や体力的なエネルギーもい」ることを考えれば、はるかにエネルギーも少なく、気軽であることを示唆する。

大島渚を介護している妻の小山明子はカトリック司祭のアルフォンス・デーケンとの対談「死を受け入れて、よりよく生きる」(『婦人公論』06・3・7)で、「主人の生きるか死ぬかを経験しましたから、『今日一日の命を大事に生きよう、明日はない』ということ」を日々実感するなかで、デーケンの本から「手放す心」と「感謝する心」、「ユーモアは生と死の妙薬」について教えられ、「『手放す心』は、なかなか私たちにはできなかった。映画監督として主人の社会的な名誉、地位があるし、私も女優として生きてきたプライドがあり、それを手放せなかったんです。でも、ふっきることができたし、一人の人間としてどう生きるか、と自分を問い詰められて、今、すごく幸せです」と語っている。

デーケンはそんな小山にむかって、「若いときは、何かを手に入れようとする、業績などは必要ですが、年をとるとともに、少しずつ段階的に手放す心を持つのは、とても重要です。私は上智大学を定年退職しました。自分の研究室を明け渡さなければならなかった。手放すのは、苦しく辛いことですね。しかし豊かな『第三の人生』を過ごすために手放すことは必要です」と同意する。「手放す心」はやがて知人や友人の死を経由して家族の死に直面し、親や配偶者を喪うことによって核心へと近づき、最後は自分自身の死に到達する。「人生の一番辛い体験は、喪失体験でしょう。まあ、人生全体が喪失体験の連続だと思います。ですから、さまざまな喪失体験にどのように対応するか(中略)。フランス語で非常に美しいことわざがあります。『別れは小さな死』というものです。つまり、誰か相手が死ねば、相手の死だけではなく、自分にとっても小さな死、自分自身の一部も死ぬということですね。深い言葉だと思います」と、デーケンは「捨てる」ことは自分の喪失につながっており、「自分の死」を意味していることを説く。

相手の死は自分にとっての「小さな死」であり、「自分自身の一部も死ぬということ」は、関係としての死を意味している筈だ。相手の死は相手と自分の関係の死としてやってくるのである。この関係性の視点を導入すると、モノを「捨てる」ことはモノと自分の関係を断つことであり、断念を通じて見えてくるもの、獲取されるものの中に入っていくことなのであろう。入手することによって失われていくものがあるように、「捨てる」ことによって得られていくものがあり、入手することでかたちづくられてきた自分の人生を、「捨てる」ことでかたちづくっていく折り返し点をどのように見極め、「捨てる」行動に後半の人生の全力を尽くすかが問われているにちがいない。

2006年7月16日記